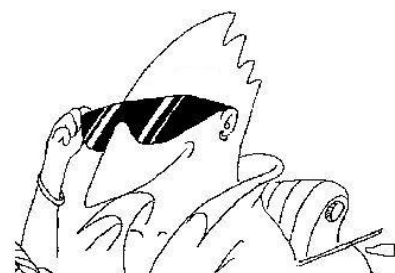


デザイナーのいない風景⑤

和洋折衷という死角



Tomy Jr.

今回は「和洋折衷のデザイン」について考えます。

最近「和モノ」ブームともいわれていて、和食が見直されたり、居酒屋風の飲み屋さんが若い人に人気だったり、ゆかたや扇子、藍染めの小物なども見かけるようになりました。しかし、そうはいつても我々の生活の基盤は既に洋風なスタイルになってしまっているわけですから、完全な和風ということではなく、どこかしら「和洋折衷」になっています。

デザインは機能的な「設計」と、美的な「意匠」の側面があり、その両方のバランスを取らねばならないわけですが、和風、洋風ともにその根底には長い歴史の中で培われた生活習慣や風土文化が流れています。それらの流れの表層に和風なデザイン、洋風なデザインが浮かび上がって我々の目に触れています。従って、その根底に風土文化や生活習慣がないデザインは極めて表層的な印象を与え、居心地の悪さや浮いた感じを与えるはずで

例えば、ファッションでいえばウエスタンルックがいくら流行ってもテンガロンハットを被るとさすがに浮きます。同じくアウトドアブームで4WD車が流行っても、車のフロントに獣よけのガードが付いているとちょっと鼻白むものを感じます。これらは我々日本人の根底に牧畜生活や開墾の歴史、フロンティアスピリットなどの精神文化が縁遠いことによるものでしょう。単順に慣れてないからだとも思えますが、逆に都会の子供が一度も着たことがない浴衣や半被、鉢巻など締めても似合ってしまうことがその反証になるでしょう

Case-1 は、我が家にある食器です。右端は完全に洋食器です。左端は焼き方からして和食器ですが、真中がそのどちらか分かりません。風合は洋食器ですが、横から見ると糸尻部分があり和食器のようでもあります。我が家ではシチューやスープやご飯皿にしています。

Case-1



我が家には中二と小一の男の子が居て、食事の時間は食べ方のマナーや躰の場でもあります。ご飯茶碗やお味噌汁茶碗は「口を近づけるのではなく、左手でちゃんと口元まで持って行きなさい」と注意します。でも、これが洋式の皿盛りのご飯やスープ皿だった場合は逆になります。「食器は持ち上げずにテーブルに置いて、スプーンやフォークで口まで持って行きなさい」と言わねばなりません。行儀の善し悪しが全く逆になってしまうのです。

そこで困るのが、洋食器だか和食器だか区別のつかない Case-1 の中央のような食器なのです。これは和食器のように口まで持っていく方が正しいのか、はたまたテーブルに置いておくべきか？躰をする親にとっても悩んでしまいます。日用での食器の選択は実用本位ですから料理に合わせて選ぶというより大きさや形状で選びます。そうなるとテーブルの上では和洋食器の混在が起き、最終的にはマナー不在になってしまう懸念があります。

Case-2



Case-2 は、学校の下駄箱です。通常は下駄箱に下足を入れ、下駄箱の中の上履きを履いて校内に入りますが、休日の場合、イベントなどで父兄や地域住民が来ます。日常は必要無いスリッパの分のスペースは無駄ですから下駄箱には用意されていません。そこで来場者用スリッパが入ったダンボール箱が登場し、綺麗な玄関先にドーンと置かれ、来場者はそこからスリッパを出し入れするという惨めな光景が当たり前になってしまっています。

下足を脱いで公共の施設やお店や他人の家などに入るとするのは和風の文化です。洋風の生活では自室などのプライベートスペース以外では靴は脱ぎません。大学や高校では日本でもこの洋風スタイルではないでしょうか？でも小中学校は通常、和風スタイルです。ところが建物は小中学校でも洋風建築にしているため、不特定多数の来場に対応する玄関のデザインが出来ずにダンボールが登場してしまうということになってしまいます。

これらのケースから私が考えること

我々の生活は、暮らしている風土の下で長い年月をかけ、先人達が築いてきた生活習慣や文化によって支えられ彩られています。その中で生まれ洗練されたライフスタイルが様々な設備や道具、製品などの美しいデザインを生んでいると思うのです。そして我々日本人はこれまでの歴史の中で他国の文化や文明を自国の中に見事に採り入れてきました。従って、今回例に挙げた食器や下足システムも、今は和洋折衷というデザインの死角に入っている感がありますが、いずれはデザイナー達の手によって綺麗に解決されていくものであると私は信じています。

(2004.7.4)